大学生にとって夏休みは稼ぎ時で忙しい時期でもある。そして、バイト先である映画館も当然書き入れ時だった。

そのため、売店はいつも以上に忙しく上映前は人でごった返していた。

唯一の救いといえば、その映画館の売店が階毎に分かれていて、人気の映画が放映される階には、ベテランのスタッフが配置されていることだろう。

このバイト先に勤めて初めての夏休みを経験する、木下一（キノシタハジメ）はやっと引いた人混みに安堵のため息を吐いた。

「一。お疲れ」

声がした方を振り向くと、掛けている眼鏡のレンズに向けて人差し指が押し当てられる。

反射的に目を瞑るとクスッと笑われてから、指を離された。

ゆっくり目を開けると、悪戯に成功した子供のような笑みを浮かべている上杉啓介（ウエスギケイスケ）と目が合う。

「毎回毎回、そうやって油の付いた手でレンズ触るなよ」

眼鏡のレンズにはポップコーンの油で出来た指紋がくっきりと残されていて、

視界が少し曇って見えた。
　またかと、ため息を吐いて眼鏡を取ると、バイト先の制服のズボンのポケットから眼鏡拭きを取り出す。
　この悪戯は、初対面の時から行われていて、初めてされた時は嫌われているのだと思いもしたが、その日のバイトの帰りにご飯に誘われて、同じ大学一年でバイトの同期同士仲良くしたいと言われたことで、勘違いをしていたことに気付かされた。
　そういうコミュニケーションをするやつなんだと分かると、される悪戯に呆れながらも次はどんなことをされるのか期待してしまっている自分もいた。
「一は相変わらず、からかいがいのあるリアクションするな。お詫びに俺が眼鏡拭くから許してよ」
　そう言って、ニヤニヤと笑いながら差し出してくる啓介の手を見ながら、一はさらに眉間に皺を寄せる。
「お前、まだ手に油ついてるだろ！　ちゃんと洗ってこい！」
「そうだった。ごめん、ごめん」

愛想笑いをして顔の前で手を合わせてから、端っこに備え付けてある従業員専用の洗面台に小走りで向かう啓介を、可愛いだなんて思ってしまう辺り恋の病というのは怖い。

啓介は体育会系で筋肉もある、いわゆる細マッチョと言われる体型をしていて、髪は茶色い髪色のエアリーマッシュで目は二重で吊り目気味、肌も健康的な色合いと、どっからどう見ても男だ。

そんな奴に対して恋心を抱くようになるなんて誰が想像できただろうか。

売店は一つのフロアに基本二人体制で、よく啓介と組まされる。

そのため話す機会は多く、それに加えて帰りに一緒に帰ったり、食事をしたり、一人暮らしをしている啓介の部屋に泊まって一緒に映画を観たりするうちに、自然と好きになっていき、気が付けばオナニーのオカズにまでするようになっていた。

目で追っていて気が付いたのは、啓介は男女問わず優しく接する性格なのでモテるということだ。

しかし、当の本人は告白をされても断ったり、恋の話をしようとしても何か隠

したいことでもあるのか、あまり過去に付き合った恋人の話をしたがらない。
しかし、そこもまたミステリアスで惹かれるところでもある。
眼鏡を拭きながらそんなことをぼんやりと考えていると、いつの間にか戻ってきた啓介に声をかけられた。
「えーっ。自分で拭いちゃったのか」
啓介の残念そうな声を聞いて、一は口をへの字に曲げた。
「何されるか分からないからな」
そう言ってレジに戻ろうとすると、またレンズに人差し指が向かって来たので、その手を振り払ってから啓介を睨みつける。
「ちぇっ」
「二度は引っかからないからな」
啓介が残念そうに舌を鳴らしたのに対して、一は眉間に皺を寄せてため息をついた。
それを見ながら啓介は、何かを思い出したのか笑みを浮かべる。
「なぁっ。バイト終わってから明日まで、時間空いてるか？」

「空いてるけどなんだ」
　啓介が嬉しそうに尋ねてきたので、眼鏡拭きをズボンのポケットにしまいながら返事をすると、啓介は小さく握り拳を握ってガッツポーズをした。
「オススメの映画あるから、一緒に観れないかと思って」
「いいよ。どんな映画なんだ？」
「観てからのお楽しみ。帰る時にポップコーン買って帰ろうぜ」
　はしゃぐ啓介を見るとこっちまで釣られて笑顔になってくる。しかし、さっきされたことを忘れた訳ではなかった。
「映画観てる最中に食べた指で、レンズ触るなよ」
　これからしようとする悪戯を言い当てられた啓介は、はとが豆鉄砲を喰らったような顔をしながら驚いていた。
「一は俺の考えてること良く分かってるな。エスパーか」
「そうだったらどうする？」
「じゃあ、今、考えてること当ててみて」
　こういう騙されやすいところも可愛なと思いながら、チラッと時計を見る。

今は三時ちょい前位で、まだバイトが終わる時間には早い。それに、仕事に関しては真面目な啓介が早く帰りたいと思うのは考えにくかった。
だとしたら、ポップコーンの話もしたし、三時といえばこれしかないだろうと思い一は口を開く。
「お腹すいたから、おやつ食べたいって思ってるだろ」
自信満々にそう言うと、啓介は目を輝かせながら驚いた。
「すげぇ。正解！　もしかして、一に俺の気持ち全部悟られてたりする」
詰め寄ってくる啓介に慌てながら、距離が近いからこれ以上は近づくなと手のひらをかざす。
「そんなわけないだろ。啓介は単純だな」
呆れながらそう言うと、啓介は怒られてしょげている子供のように眉を下げながら、口を尖らせた。
「もっと他に言い方あるだろ。ピュアとかさ」
「それ自分で言うのか」
啓介があまりにも子供っぽいことを言うので、思わず笑ってしまう。

そんな一を見て、啓介も釣られて笑い出した。
「いいじゃん。それよりポップコーン何味にする？」
「バター醤油」
「即答かよ！　俺も好きだからいいけどさ」
顔を見合わせて笑い合う。こうやってくだらない話で盛り上がれるのも啓介の好きなところだったりする。
「夕飯も食べるのか？」
「もちろん！　今日は冷蔵庫にカレーが残ってるから一緒に食べよう」
「もしかして、映画もだけどそっちの目的もあるのか」
田舎から上京してきた啓介は、実家から仕送りをもらいながら一人暮らしをしている。
そんな啓介は、外食ばかりでは健康に悪いと自炊をしているが、たまに作りすぎてしまい、一はそれを食べる係となっていた。
「良く分かったな。昨日、作りすぎちゃってさ。夏は食べ物腐るの早いし、冷凍するにしてもカレーばっかは飽きるからな」

「やっぱりそうか。まぁ、啓介の作る料理なんだかんだで美味いからいいけど」
実家にいた時から、家事を手伝っていたらしい啓介の作る料理は、安定して美味しいので、食べるのを楽しみにしているところもある。
「嬉しいな。ご飯ちゃんと炊いてきたし、とろけるチーズもあるから乗せようぜ」
「想像するだけでお腹空いてきたな」
そう話しているうちに、次の上映時間が迫ってきたのか、お客がフロアに集まっていく。
二人して慌てて自分達の持ち場に戻ると、二人で分担しながら仕事をこなした。
ふと、ポップコーンを取りに行く最中に啓介の方を見ると、二十代のカップルらしい男性二人組を接客している最中だった。
やけに距離が近いそのカップルをよく観察してみると、俯いている童顔な顔をしている方が小刻みに震えながら、顔をみるみるうちに赤く染めていく。
もしかして、これが俗に言う野外プレイってやつなのかと気が付くとこっちまで恥ずかしくなっていく。

慌てて目線を逸らすと、下半身が熱くなっていくのを気のせいだと誤魔化しながら、ポップコーンを容器に詰めていった。

「疲れたー。仕事終わりのコーヒー飲むだろ」
「飲むけど、おっさんかよ」
「おっさんはビールじゃないのか？」
バイトが終わり啓介の部屋に着くとすぐに、お気に入りのソファーに座る。
１Ｋの部屋は片付いており、ナチュラルなインテリアで落ち着いた空間になっていた。
とくに、そこに置かれているソファーとクッションは、とても肌触りがよく気持ちがいい。
ソファーの前には長方形のローテーブルが置かれてある。
啓介がキッチンにカレーを温めに行ったついでに、飲み物を取りに行っている

うちに、一は母親に泊まると連絡をした。
返信は数秒で返ってきて、ＯＫという母親がハマっているらしいキャラクターのスタンプが送られて来る。
それを見ながら微笑んでいると、横から啓介の声がした。
「ほら。コーヒー」
その声に画面から目を離して顔を上げると、頬に冷たい物が押し付けられる。
「ひゃあ！」
驚いて変な声を出してしまった恥ずかしさで、顔が赤くなっていく。
その様子を見ながら、啓介は楽しそうにクスクスと喉を鳴らしながら笑っていた。
「やっぱり、一は可愛い反応するな」
そう言って笑いながら、啓介は席に座って持って来た缶コーヒーを二つテーブルにおく。
それを見計らって一は缶コーヒーを持つと、啓介にされたように頬に缶を押し付けた。

「このっ」
「冷たっ！」
瞬時に頬に手のひらを当てて温める、啓介の可愛いリアクションに思わず笑ってしまう。
「啓介だっていい反応するじゃん」
「やったな」
今度は啓介が仕返しと、腰を掴んできてくすぐり出す。
「んんっ。やめろって。腰は反則っ」
元々、腰が弱い自覚はあったが予想以上に甘ったるい声が出てしまい、顔が赤くなる。
その反応に気まずくなったのか、瞬時に啓介は腰から手を離してキッチンの方を向いた。
「あっ。そろそろカレー温まったかな？」
台所へと消えていく啓介を目で追うと、少しばかり肌が赤くなり蒸気しているように感じた。

その反応を見て一も動揺しながらも、缶コーヒーを開けて口を付ける。
冷えたミルクコーヒーはやけにまろやかで甘く感じた。

啓介がカレーを器に盛って持ってくると、食欲をそそる香りが漂ってくる。
上に乗っているとろけるチーズと、添えられている福神漬けがさらに食欲をそそらせた。
二人して手を合わせていただきますをすると、大盛りのカレーにスプーンをいれて一口食べる。
カレーの辛さと、とろけたチーズのまろやかさ、福神漬けの甘さとシャキシャキ感の相性が抜群で、一口食べただけで分かるほどの美味しさだった。
「啓介の作る料理、相変わらず美味いな」
「喜んでもらえて良かった」
お互いに顔を見合わせて笑うと、またカレーにスプーンを伸ばす。

夢中になって無言で食べていると、啓介が先に口を開いた。
「夕方頃に、バイト先のエレベーター止まったって言ってたよな」
更衣室で他の人から聞いたのを思い出しながら、啓介はつぶやく。
「男性二人が閉じ込められたって言ってたけど、無事で良かったな」
よく使うエレベーターなので他人ごとではないと心配した一は、無事だと言う話を聞いた時、安心した。
ふと、横を見ると、啓介に見つめられていることに気が付く。
「なぁ。もし、俺と二人でエレベーターに閉じ込められたら、一はどうする？」
いきなりの質問の答えに一は戸惑った
「どうするって言われても。とりあえず、非常ボタン押して助けは求めるだろうな」
「それから？」
「それからって。いつもみたいに話して時間潰すんじゃないか？」
普通のことを話したはずなのに、啓介は納得いかないらしく眉間にシワを寄せながら口を尖らせた。

「そうか……。ごちそうさまでした」
　拗ねた啓介は一がどうしたのか聞く前に、台所に食器を運ぼうと立ち上がってしまった。一はそれを慌てて止めようとする。
「そうかってなんだよ。あっ。皿、俺が洗おうか？」
　袖を掴んで見上げながらそう聞くと、啓介は動きを止めて微笑んだ。
「ありがと。ところで風呂と映画、どっち先にする？」
「遅いし、いつ寝落ちしてもいいように、風呂にしようかな」
「じゃあ、風呂の準備しておくな。この前、置いていった着替え、洗濯しておいたから後で出しておくな」
「ありがとう。カレー美味かった。ごちそうさまでした」
　そう言って、啓介に微笑みかけながら胸の前で手を合わせると微笑み返された。
「どうも。今度は何作ろうかな」
「麻婆茄子とかどうだ？」
「夏野菜といえば茄子だし、いいな」
「今度作るときは、俺も手伝うよ」

「なんかいいな。二人で台所立つって」
「どういう意味……」
啓介に思いを馳せるような表情をされ、反射的に言葉が出てしまう。
両思いなのではないかと期待で胸が高鳴り、返事を待つ間、無意識にずっと啓介を見つめ続けていると、目を逸らされた。
「なんでもない。風呂の準備してくる」
そのまま、逃げるように風呂場へと向かう啓介を目で追うと、先程、台所へと消えていった時と同じくらいに少しばかり肌が赤くなり蒸気していた。
その反応を見て一は一つの答えに辿り着いた。
「もしかして……」
啓介と両思いなのではないだろうか。

皿を洗って、風呂に入り終わった後、テーブルに買ってきたポップコーンを置

いて、プロジェクターにスマートフォンを接続すると、画面に映画のサブスクリプションサービスのホーム画面が映し出される。
「飲み物、麦茶で平気か？」
「あぁ。寝る前だしな。ありがとう」
啓介は台所に行ってグラスに麦茶を注ぎ、それをテーブルの上に置いてから、プロジェクターのリモコンを手にすると再生ボタンを押した。
画面に目をやると、仲の良さそうな男性二人がこちらに向かって歩いてくる。
「これ、なんの映画なんだ？」
「あぁ。一ってＢＬ作品に興味あったよな」
「あるけど」
「そんな一に漫画原作でオススメのＢＬ映画があるから、それ観ようかなって」
「なんだ。なかなか言わないから、グロい映画かと思った」
安心して、ポップコーンを一粒口に入れてから目線をスクリーンに移す。
出会ってしばらくだった頃、好きな漫画の話をしていた時に、啓介からＢＬ漫画について話された時があった。

自分はドラマで少し観たことがあるくらいだったので、その話を聞いて少し興味が湧いていたのだが、思ってた以上に作品数とジャンルがあり、自分に合う作品というのを見つけるのに苦労していたので助かった。
「流石に、寝る前にそれは観たくないだろ。観るなら今度いいのがあるから観ような」
「グロいの苦手なの知ってるだろ。観ないからな」
クスクスと揶揄うように笑う啓介を睨みつけると、降参したらしく両手を上に上げていた。
「怖がる一も観てみたいけど、まぁ、いいか」
そう言って両手を下に降ろしてから画面に見入った啓介を、横からしばらく見つめてから画面に目を移すと、知らない間に、シーンはセックスをしているところに変わっていた。
男優の演技があまりに上手く、プライベートでも付き合っているのではと疑うほどに、目線を逸らさないような情熱的なセックスをしている二人を見ながら、一は今日バイト先に来ていた距離の近いカップルを思い出していた。

あの二人を接客した啓介は、どう思いながら見ていたのだろう。そういうことをしてみたいとか、願望があるのだろうか。

気になってしまい、映画に集中できずにいると、啓介がこちらに身体を寄せてきた。

また、何かイタズラされると身構えると、耳元に顔が近付いてきて熱い吐息がかかる。

「一はさ、誰かとこういうことしてみたいって思ったことある？」

「そ、そりゃ、健全な男子だしあるけど」

熱のこもった声で囁かれて、耳に熱い吐息がかかると、ドキドキと心臓が高鳴っていく。

会話の内容といいイタズラにしてはタチが悪いと思いながらも、もしかしたらこのまま啓介とセックスできるのではないかという可能性を期待してしまった。

「今、好きな人いるのか？」

「いるけど、なんだよ急に。からかってるのか」

もしも、違った時を想定して相手を言わないでいると、勢いよく肩を掴まれて、

眉間に皺を寄せている啓介と目が合った。
「からかってないし、真面目に聞いてる。相手誰だよ」
これまで見たことがない啓介の切羽詰まった表情に、イタズラではないことが分かると、一は真剣な顔をして啓介と目線を合わせた。
すると、お互いに顔が段々と赤く染まっていく。
「俺、なのか？」
「そうだよ、悪いかって……おい！」
言葉を言い終わる前に、啓介は一の首に腕を回すとそのまま抱き寄せた。
いきなりのことに驚きで目を見開いていると、そのまま構わず体重をかけてソファに押し倒される。
「俺も、一のこと前から好きだった」
そう呟きながら顔を見合わせられると、唇が触れそうな距離まで近づいてくる。
熱い息が唇にかかると、うるさいくらいに心臓が鳴り身体が熱を持ち始めた。
「いつから好きだったんだ？」
「バイト帰りに一緒に帰ってるうちに自然と好きになってた。一と一緒にいると、

楽しいし安心するし意地悪したくなるんだ」
「い、意地悪したくなるは余計だろ」
お互いに両思いだったことを嬉しく思って、照れながらゆっくりと啓介の背中に手を回すと、抱きしめた腕から暖かい体温が伝わってきた。
「俺さ、好きな人には意地悪したくなるんだよね。特に一は可愛い反応するしいじめたくなる」
意地悪そうな笑顔でそう言う啓介に、唇を軽く熱い舌先で舐められると、身体がゾクっと反応し陰茎が熱を持ち始める。
「啓介ってもしかしてSなのか？」
「分からない。だから、一で確かめさせてよ」
軽く下唇を甘噛みされ痛気持ちいい感覚に浸っていると、再び熱い舌先で唇を舐められる。
快感に身体を震わせながら、もっと欲しいと薄く唇を開けると、肉厚な舌が口内に入ってきた。
「ちょっ……んんっ……はぁっ♡」